ごあいさつ

瞳をひらいて、持続すること

井　上　　肇

平成22年度当初の定期人事異動により、お世話になることになりました井上です。

鈴木敏昭前館長同様、よろしくお願いいたします。

毎朝、8時丁度に長瀞駅に降り立ちます。メタボ体型からの離脱をめざしての「一駅手前」行動です。結果はまだ出ません。約2時間弱の小さな旅の末には、「長瀞は天下の勝地」の石碑が迎えてくれます。言わずと知れた渋沢栄一翁の筆になる秀逸なキャッチコピーです。私は、この碑文を眼にするたびに、決まってひとつの言葉が浮かんできます。些か唐突ですが、「義を明らかにして、利を計らず」です。幕末の陽明学者、備中松山藩（現、岡山県高梁市）執政山田方谷の言葉です。そして、渋沢栄一の説いた「論語と算盤」、即ち利徳合一論には、陽明学者山田方谷→三島中州（二松学舎創設者）→渋沢栄一の系譜があることが知られています。私にとって、この方谷の言葉は、さまざまな困難に直面した折、常に言動の中心に据えてきた大事な規範のひとつでもあります。

閑話休題

先日思い立って、日本三大山城のひとつ、美濃岩村城（現、岐阜県恵那市）に出かけてきました。

静謐な佇まいの城跡から眺める山並みは美しく、圧巻でした。江戸時代の終わりに、幕府の昌平坂学問所の総長を務めた佐藤一斎は、この岩村藩出身であり、その弟子のひとりが山田方谷です。

また、方谷が藩政改革の成果をあげた備中松山藩の高梁城も、三大山城のひとつです（もうひとつは、現奈良県高取町にある大和高取城）。我が故郷の近くにあって、幾度となく訪れたこの城跡から眺める高梁川に沿った城下の町並みは、今なお懐かしく、時折思い浮かべる思い出深い景色です。

さて、岩村城下への道すがら、遠目に霧氷の付いたような大きな木を見つけました。後に、それが「ナンジャモンジャの木」であることを知りました。数年前の夏、名前に惹かれて植物園に行ったことも思い出しました。正式には、ヒトツバタゴ。同じモクセイ科のトネリコ（別名、タゴ）に似ているところから「一つ葉（単葉）タゴ」とよばれるようになったとか。日本では、対馬、岐阜県・愛知県に「隔離分布」している絶滅の恐れのある落葉高木ということを教えてもらいました。

以上、なんとなく山・町・花に因む景観話、3つ。

お話を戻します。

佐藤一斎から渋沢栄一に繋がる系譜の中で、当博物館にとって山田方谷の説いた「義」は、「博物館資料を中心に据えた、館職員と全ての利用者の幸福」ではないかと考えました。

埼玉の県立博物館施設では、平成18年度から数値目標を定めた博物館評価システムによる自己評価等を実施しています。実際に自己評価を行う中で、博物館としての「義」＝「公共空間としての博物館、そこに集う全ての人々、全資料にとっての望ましい姿」の実現に向けてひとつとして欠くことなく、本来の存在意義を主張し続けられているかどうか、をベンチマークとして念頭に置く必要性を強く感じます。数値に捕らわれすぎて、本質を忘れた思考と行動は厳に慎み、二つの瞳で現状を捉え直すことで、見えてくるものを大切にしたいと考えます。本来なすべきことに対して、当館職員が共通の認識を持ち、自らの位置を正確に把握し、改善すべきことと方向性を定め、確実に解決していくことが肝心であると思います。

かつて、自動車教習所で「遠目を定めて運転しないと、事故のもと」と繰り返し教わりました。

大きく瞳を開いて、博物館法をしっかり読み解き、その基本理念の具現化に向けて、安心・安全で持続可能な博物館運営に取り組んでまいりますので、引き続き倍旧の御支援・御協力をお願い申し上げます。

（いのうえ　はじめ・館長）